PERFECT　DAYS　紹介と感想

主人公は判で押したような生活を送っています。
朝、近隣住民の竹ほうきの掃除の音で眼ざめ、歯を磨き顔を洗い髭を剃り育てている植物に水をやります。作業着に着替えタオルを首に巻いて玄関におり、玄関かに置いている車・家の鍵と小銭を、持ち家を出ます。家の前にある自販機で缶コーヒーを買い車に乗り込みコーヒーを飲みお気に入りのカセットテープをラジカセに入れて仕事場（公衆トイレ）に向かいます。数か所の掃除を終えるとお昼は神社のベンチでサンドイッチと牛乳を頬ぼります。フィルム式のカメラで木漏れ日を一枚パシャリ。午後の仕事を終え夕方帰宅。自転車に乗り換え近くの銭湯へ開店と同時に入店します。顔見知りの人達に会釈し、綺麗に身体を洗ったあと、ゆっくり湯船に浸かります。湯上りの休憩後、再び自転車に跨り地下街行きつけの居酒屋で２，３品のおつまみで一杯。帰宅後は入眠まで小説を読みまた次に朝を迎えます。
休日は作業着をコインランドリーで洗い、写真屋で木漏れ日写真の現像（自宅で出来の良かった写真のみを残し残りは破棄)、古書店で文庫本を物色、夜はいきつけの小料理屋で客のギター演奏に合わせて女将の熱唱を聞きます。

この映画は基本、この主人公の日常生活を淡々と描きます。
一見同じ日の繰り返しに見えますが、同じ日はなく同じように見えて少しの刺激を楽しみます。
例えば神社で休憩中に隣の方と会釈する、トイレに誰かが忍ばせたＯＸゲームの相手をする、新しい苗木を持ち帰るなど、細やかですが慎ましい生活を送っています。

風呂無しのアパートに住み決して裕福とは言えない毎日ですが充実した生活。
主人公はもともとかなり裕福な生活を送っていたようです（妹が運転手付きの高級自動車に乗っている、また妹が「今ならお父さんも…」と言っている事から一族経営の一流企業でおそらく主人公はそんな経営者の父親と軋轢があり家を出て今の暮らしを送っていると推察出来ます)。
お金だけが幸せの象徴ではない。
度々映し出される東京スカイツリーとそのもとにある主人公のアパート。
煌びやかに輝くスカイツリーは派手で富の象徴に写ります。一方で主人公のアパートは対照的に華やかさはありません。
まさに木漏れ日、いうならば光と影。
しかし影も重なれば濃くなる。

キーパーソンは何名か出てきます。
妹の娘、仕事に不真面目な後輩とその彼女、小料理屋の女将とそのもと夫、古書店の店主…
そこにいちいち細かい説明はありません。
自ら読み取る、想像する事が求められます。

今回はいつになく取り留めのない紹介内容になりましたが、こう紹介するしかないというか、ストーリーを細かく追って紹介するような映画ではないと思います。

役者と東京の何気ない風景、監督が込めた思いを受け入れる作品。
ヒトコトで言うなら「グッとくる映画」です。